
ネタまみれの三番目 パーと2

東方人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネタまみれの三番目 ぱーと2

【Nコード】

N4803R

【作者名】

東方人

【あらすじ】

これはネギ達が京都への修学旅行へ行く2ヶ月前の会話……ってあれ？

未だに旧世界に向かっていないフェイト・アーウェルンクス。やはり全裸のデュナミス。そして、クールにツツコム焔。

この無表情3人が、いつも通りにネタにまみれた会話を紡ぐ。

ぱーと2ということで、一番最初を読んでからご覧ください。

ネタです。いや、ネタだつて。超絶駄文にキャラ爆砕。ネタに蔓延した完全なる世界勢を見たくない人はすぐさまブラウザバックで緊急回避しようぜ！

（前書き）

「おや、また来てしまったのかい？ 君は勇者^{ヒーロー}のようだね。ここから先は愛と勇気が友達でも近寄れないカオスを通り越したヘドロ空間だよ。それでも先へ進むのならば必殺技を授けるよ。一撃ですべてを葬り去る、アンパンチだ」

「……………ん？ アンパンチ？ アンパンチ、あんぱんち。……………
Un - P u n c h」

「……………パンチじゃないのかい！？」

— F a t e A v e r r u n c u s

— 金曜日の夕方、お茶の間にて驚愕を顕わにしながら。

デユナミスとのアホ会話から1ヶ月が経った。本来なら今頃旧世界で任務という名のニート生活を送っているはずだった僕ことフェイト・アーウェルンクスは、

「……………いい加減旧世界へ迎えというに」

「デユナミス。君はヤンデレの本当の恐怖というのを知らないからそんなことが言えるんだ」

知ってるかい？ ヤンデレからは逃げ切れない。

現に未だに外へ出ることすら出来ないからね。

「天井に張り付いて汗垂らしながら威張ることではないぞ」

「うるさい。気が散って落ちる」僕は今、デユナミスと会話した聖堂の天井に立っていた。

デユナミスのちょうど真上に、足の指で天井を掴んで、その状態を保ち続ける。

あえて言おう。重力の負荷が凄まじい。

これで腹筋を使って上体を起こすとか無理すぎる。どんな化け物さ。

「自分の従者すら制御出来んのかお前は。相手は女だぞ?」

「だから余計に怖いんじゃないかい」

「お前の股間のマグナムは何のためにしている」

「……………え？」

一瞬いつも通りデュナミスという名の変態の戯れ言だと思ったけど……………。

……………え？ 自分の従者を制御するためについてるってことかい？ それって、

「もしかして……………僕についてない可能性も有った……………と？」

「……………」

何かを考え込むように顎に手を当てたデュナミス……………
って、

「死んでくれデュナミス」

何を想像したのか分からないが、女の子だった場合の僕を汚したことは分かるよ。

だから服を着ると言ったんだ。丸見えなんだよ、また僕をゲボらせる気かい。

「あべしっ!!」

僕は無詠唱で出現させた“冥府の石柱”でデユナミスを潰した。

「君は変態という名の紳士じゃない。変態という名の犯罪者さ」
ペドフェリア

まあ、常に全裸マン状態の時点でもう駄目だけど。

—— こっちからフェイト様のお声が。

—— フェイトたんフェイトたん……………ふう。

—— くんかくんか。こっちからフェイト様の匂いが。

—— 風が気持ちいい。

—— アンタらは……………はあ。

「……………」

ヤバい。今でバレたようだ。しかも従者勢揃いのようなね。この
ままだと監禁コース一直線だよ。

しかも、三名ほど限界寸前がいるせいか、唯一のストッパーが呆れ
て対処出来ていない。

死ぬる。

「天井に張り付いているだけでは見つかるんじゃないか？」

だからなんで君は無傷なんだ。というより女の子に裸一貫で会うのはいいのかい？

「問題ない」

どこのゲンドウだ貴様。

くっ、この聖堂は正面の扉以外に出る場所は存在しない。今出ようとすれば必ずかち合う。

もう『知られざる英雄』並みに存在感を殺すしかない。“絶”でもいいよ。魔力を漏らさないようにするから。

「……………いいのか？ 魔力まで切ってしまっ

「切ってから気づいた。今僕の足の指の寿命がマッハで削れてく」

もげる。足の指がもげる。

「デュナミス。彼女達がここへ来たらフェイトはいないって言うてくれないかな」

「バレたらどうする気だ？」

「全速前進DAI」

「コマンドを入力しても逃げ切れるか分からんがな」

1ヶ月も逃げ続けてるんだ。もう強行突破ぐらいしかすることがない。

というかその間お風呂にも入れないんだよ。水の魔法で清潔には保っているけど、服も肌着も1ヶ月ぶっ続けなんだ。

だって、脱ぐと無くなるんだよ。

この前ゴミ箱に、僕のパンツだと思われる物体が捨ててあったんだ。

………なんかよく分からない液体でどろどろになっていた。

見なかったことにしたよ？ 怖いじゃないか。

「それで、もうすぐ来るぞ？ どう行動する気だ」

「扉が開いて視線がデユナミスに向いた瞬間に“虚空瞬動”で彼女達の背後に飛ぶ。“ゲート”だと魔力追跡されて先回りされるから連続瞬動で振り切る」

「ほう。成功確率は？」

「例え勝算がマイナスでも僕は逃げる。僕は旧世界でニート神になるんだ」

「お前任務のこと忘れてないか？」

働きたくないでござる。

「……………失礼します。デュナミス様」

鈴の音のような澄んだ声と共に、扉が開く。

ゆっくり開かれた扉から顔を出したのは、金髪のツインテールの少女。

唯一の清涼剤である焰だった。

「……………焔か」

デユナミス、ちょっとは前を隠したらどうだい。いくらなんでも堂々とし過ぎだろう。

ここで普通だったら焔が悲鳴をあげる。見たくもないモノ見せられてるからね。

ただ、良くも悪くも焔達従者は慣れている。同類もいるから……………。

「……………はあ。環にも言ったんですけど、風邪引きますよ?」

「問題ない」

「どこのネルフですか貴方」

呆れながらもネタに対応する焔。ストッパーとして共にいることが

多い焔は、いつも僕達の会話を聞いてるため、ネタにも反応出来るようになっていた。

「まあ貴方が全裸なのはいつものことですし、スルーします」

「男の裸を見て、何か思わないのか？」

「とりあえず吐き気が」

「ズドツと貫いたな。私の心に“牙突”が入ったぞ」

「それよりも、貴方に向かって“二重の極み”」

「ア——ツツツ！！！」

デュナミスの身長は高く、焰の背はあまり高くはない。つまり、それで彼女が正拳突きを繰り出すと、当然デュナミスの股間に拳が入る。

おお、デユナミス。死んでしまうとは情けないよ。

「フェイトさん。降りてきてもらえますか？ さすがに首が痛くありません」

「いつ気がついたんだい焰」

「普通に考えて、部屋の中に水溜まりがあつたら雨漏りかと思って上向きますよ」

「その発想はなかった」

垂れる汗が原因だったとは……………。

「もう“垂れる”ではなく“流れる”になってますよ。まだあの子達は来ないのでやせ我慢止めて降りてきてください」

確かに心に“牙突”が刺さるよデユナミス……………。

自由落下に従って、床に着地する。

なんかビリビリ来るよ。ビリビリ。

「高いところから落ちたからでしょう。ちなみに、ビリビリの声は英雄の子供そっくりです」

今すぐ見に行くよ！！ いざ旧世界ッッ！！！！

「そんな無表情で張り切られても。今行くとかち合います、って——」

ポッ、と火がついたような音が耳に届く。

……………ん？ 頭が熱い。

「落ち着いてください」

「――」

着火した。
熱いと思ったら、僕の頭に着火した。

「火とかけまして、貴方の従者のヤンデレ具合・変態具合ととく」

「……………その心は」

「火を見るよりも明らかです」

うまくないうまくない、と僕の頭がフジヤマヴォルケイノッッ！
！！

「そんなゴロゴロ転がらなくても、水の魔法で消せばいいのでは？」

はっ、その手が有った。 “ 水よ出る ”

水遁大瀑布。

「出しすぎでしょう」

ちよつと。空中で見えてないで助けてくれないかな。今にも溺れそう
なんだけど。

「私炎っ娘ですから」

なんとという新ジャンル。あれかな？ 『アタイに触れると火傷する
ぜ』を体現する気かい。

「私に触れると爆発します」

「なにそれもう誰も手が出せない、ブクブク」

地のアーウェルンクス………大瀑布に沈む。

言葉だけならカッコいいけど、自分でやったから微妙かな。

「案外余裕ですね。放置でいいですか？」

「助けてくれないかな。僕は地のアーウェルンクスだから、余計に沈む」

「解除すればいいのでは？」

「その発想はな——」

「言わせねーよ」

なんです。

魔法の解除して、肺まで入った水を胸に突き当てる『寸勁^{すんけい}』で振動させ吐き出す。

おっと、血まで出てきた。

な、なんじゃこりゃあああ——

「さすがに古いです」

「それよりも僕の頭がアフロになっている件について」

「そ……………それはじ、自業自得、で、ですよ。……………ぷぷ、ふふ
ふ」

堪えられてないよ焰。

これはもうアフロダンサーになれと造物主のお告げとしか考えられ
な——

「それは止めてください」

急に真顔になられると怖い怖い。って顔が近い近い。

「そんなことしようとしたら、あの子達に差し出しますよ?」

……………おお、こわいこわい。本気で。

「……………いつまで無表情なんですか。少しぐらい顔を赤らめてくれたって」

「何か言ったかい？」

「何でもないですよ、はい」

いつも通り無表情の焰だ。ただ耳が赤い気がするけど。

気のせいかな。

「……………そういえば、デユナミスは？」

さつきそこら辺で呻いてたんだけど……………。

「さつき流れていきました。『それでは皆さんご唱和ください。』
It's 大嘘《All fic》モガーツツ！！！！」って

ネタで命を落とすなんて……………君って男は。

デユナミス、君のことは旧世界に行くまでは忘れないよ。

「忘れるの早いですね」

「墓標には“ネタに生き、ネタで逝った男”と彫ってあげようか」

「末代までの恥ですね。私じゃ恥ずかしくて生きていけませんよ」

……………そうかい？ 男らしい最後だと思っけど。

「貴方達の感性が分かりません。もちろん、分かりたくもないですが」

おお、ひどいひどい。

「それでもネタに走るんですね」

「もちろんさ」

「らんらんー」

僕の身長はハンバーガー四個分――

「なわけないでしょう」

おお、ひどいひどい。

「ぐっちゃぐちゃに虐めますよ?」

おお、ひどいひどい――

ヒュン、と風を切り、焰の左眼が赤く燃える。

直後バンッ!と僕の頭付近が爆発した。

「次は頭ごと爆発させます」

なにそれこわ——、ごめんなさい。

焰は僕と同じで無表情だから、どこまでが本気か分からないから、デユナミスと違って引き際が分からないのが難点だ。

「というより、いつまで私と会話してるんですか？」

……………ん？

「もうすぐあの子達来ちゃいますよ？。」

——時よ止まれ

「そんなんで止まったら苦勞しませんよ」

………こんな時こそライフカードデュエルさ。さあ、今出来る僕の行動は。

一枚、『このまま焰と会話』

一枚、『デュナミスの搜索』

一枚、『ゲートにて転移』

二枚、『しかし回り込まれた（逃げられるわけねえじゃんよ）』

この五枚で——いや何が出来る？

「……………」

「サレンダーですか？」

「……………」

「……………ん？」

「……………」

「……………」

「……………」

— 続きはWebで！

「う？」

「う？」

「すでにWebですが」

「」

ぞ、続編で！！

「知りませんかね」

行かないで焰……………。

（後書き）

留年していると思ったら、進級出来ていた。

ヒイイイヤッホオオオオオオオオオオ！！！！！！
と勢いあまつて書いてしまいましたよ、ええ。

今回は何人見てくれたんでしょう。続編を期待する人はいるんでしょうか。

はい、続編書きます。いや、マジで。多分だけど。

ただ、これを書き続けると、完全なる世界勢と主人公勢の温度差が酷いことになるよ？

主人公勢はドシリアスで戦いながら、フェイトはアホなことを考えているとかさ。

しかも、続きの内容が、あるエロゲとクロスします。物語そのものがクロスするのではなく、あるモノがクロスします。

それによって、余計ドロドロに。あり得ないほどチート化します。

ある人物たちが。

もつともやばくなってしまいそうなのが、今の段階でネギくん。ちよー逃げて。

まあ、ヒントとして、今回フェイトが苦し紛れに言ったことが、クロスもとにかかわることです。つうか、これで分かった人はすごい。というわけで、タイトル考えないと。今のままのタイトルだと、主人公勢のシリ阿斯を書けないから。だれかいタイトルないですか？ 自分には今のところないっす。

3話を書けたら、短編を消さずに、連載形式に移行します。

期待されると疾走するから。間違えた、失踪するから。

「ゆつくり更新するよ！ だからあまあまちょうだいね！！」
ゆつくり並みの更新なので、ご了承ください。

では、これにて。

だれか、フェイトに言わせたいネタください。俺っちじゃもつないよ（泣）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4803r/>

ネタまみれの三番目 パーと2

2011年7月6日21時38分発行